

2. 保温温度の基本概要について

2-1. 保温温度の基本概念について

1mlを1℃上げるエネルギーが1カロリーです、温めるものの容量が多いほど熱量が必要になりますが必要な設定温度は決まっているので時間が必要になります。

「温度値」×「容量」＝「時間」

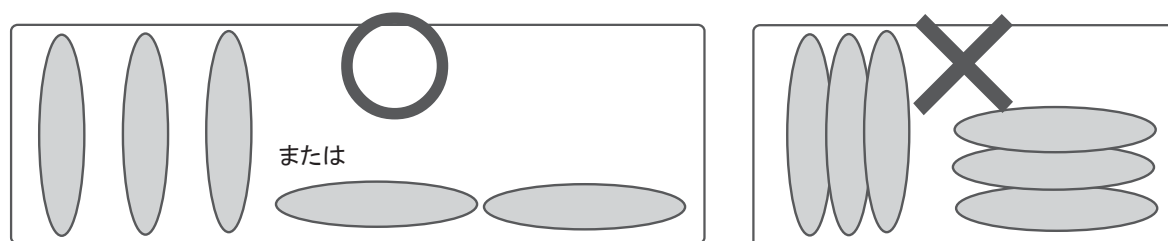
2-2. 保温温度に影響する要因について

輸液が設定した温度まで温まるためには温風の熱がソフトバッグを通して輸液につたわることで温まります。同じ要領のソフトバッグでも状況で温まる時間に影響します。【参考図 5】

※バッグの隙間を開けて温風が全部に行き渡ることが重要です「重要」

【参考図 5】輸液の入れ方により温まる時間が大きく異なり また、温度のばらつきが発生します。

その温まる時間はバッグの積み重ね数に比例します。長く保温すると設定値になります。



輸液の取り出しサイクルが早い場合は必ず隙間を開け、前日に入れる場合は積み重ねも可能です。

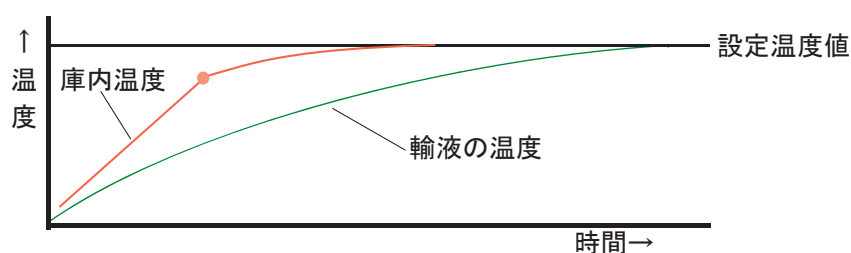
3. 保温時間の基本概要について

3-1. 保温時間の基本概念について

保温庫の基本容量が小さい機種が原因で短時間サイクルの使用の場合は庫内の温度が設定値になっても入れた輸液は設定温度値に達していません、保温に必要な時間が必要です。【参考図 6】

この商品の温度管理値は設定値+0～-1.5℃です。出荷時は設定値の-0.5℃を中心値としています。設定値プラス0の設定は輸液を長時間入れておいてもプラス温度にしない為です。

【参考図 6】



3-2. 保温時間に影響する要因について【参考図 7】

【参考図 7】

時間が短い

輸液の保存温度 高い⇔低い
輸液の容量 少ない⇔多い
輸液の庫内への入れ方(上記2-2)
保温庫の周囲温度 高い⇔低い

時間が長い

4. 保温温度と保温時間の基本概要について

4-1. 保温温度と保温時間の基本概念について

上記のように「〇〇mlのソフトバッグ」で「設定温度〇〇℃」で「〇〇分で保温」を一律に決定することは出来ません。1年を通して同じ時間で温める場合は環境の条件を同じにすることが必要です。

したがって、時間の余裕をもって保温するようにして下さい。(長時間保温しても輸液の温度は設定値です。)

■実験上の条件での温まる目安のデータは【参考図 8】を参考にして下さい。